

La nascita della cultura fiorentina

La musica a Firenze dal '200 al '600

アンサンブル・ミュージカ・リチェルカータ

フィレンツェ文化の誕生 13世紀から17世紀までのフィレンツェの音楽



Ensemble Musica Ricercata

(direzione: M^o Michael Stüve)

Alessandro Carmignano: controtenore

Michael Stüve: viella

Shigeharu Yamaoka: flauto dolce

Masako Hirao: viola da gamba

Sergio Bernetti: trombone

アンサンブル・ミュージカ・リチェルカータ

(主宰: ミハエル・シュトゥーヴェ)

アレッサンドロ・カルミニャーノ (カウンターテナー)

ミハエル・シュトゥーヴェ (ヴィエツラ)

山岡重治 (リコーダー)

平尾雅子 (ヴィオラ・ダ・ガンバ)

セルジョ・ベルネッティ (トロンボーン)

PROGRAMMA

Guillaume Dufay "Vergine bella, che di sol vestita"

(testo: Francesco Petrarca)

Francesco de Layolle "Vien dunque, Amor"

(testo: Giovanni Boccaccio)

Bernardo Pisano "Così nel mio parlar"

(testo: Dante Alighieri)

Francesco Landini Ballata "Gran piant'agli occhi"

Heinrich Isaac Pezzo strumentale: A la Battaglia

Iacopo Peri Lamento dell'Orfeo

"Non piango" dall'opera Euridice ed altre

ギョーム・デュファイ作曲「陽光に身を包む麗しの乙女よ」

(詩: フランチェスコ・ペトラルカ)

フランチェスコ・デ・ライヨッレ作曲「愛よ来たれ」

(詩: ジョヴァンニ・ボッカッチョ)

ベルナルド・ピサーノ作曲「かように我が言葉も」

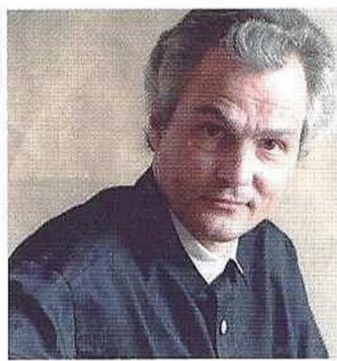
(詩: ダンテ・アリギエーリ)

フランチェスコ・ランディーニ作曲「目に涙の海をたたえて」

ハインリヒ・イザーク作曲「戦い」

ヤコポ・ペーリ作曲「私は泣かない」

(オペラ『エウリディーチェ』より、オルフェオの嘆き) 他



Musica Ricercata ミュージカ・リチェルカータ

1989年にミハエル・シュトゥーヴェによって創設されたこのグループは、1998年に音楽芸術と文化の普及を目的に掲げた非営利組織となる。フィレンツェの偉大な音楽遺産をもとに演奏活動や研究活動を繰り広げており、珍しいプログラム構成、テーマの特異性もさ

ることながら、古代ギリシャ音楽から現代音楽まで西洋音楽史の流れに沿った再現で高い評価を得ている。主宰、音楽監督を務めるM. シュトゥーヴェのもと、ヨーロッパ各地、ロシア、日本で演奏活動を行い、イタリア及び国外において数多くの音楽祭に出演する。放送局での録音も多くこなす傍ら、国際会議、講演会、セミナー、セミナー・コンサートを主催、出席をし、音楽研究活動の成果として出版物もだしている。

2005年4月8日(金)

場所●京都府立府民ホール アルティ

TEL.(075)441-1414 地下鉄烏丸線「今出川」駅6番出口 南へ徒歩5分

開場●18:30 開演●19:00

料金●前売り¥2,500 当日¥3,000

シルバー(65才以上)/学生 ¥2,000

チケット取り扱い●アルティ/075-441-1414

イタリア文化会館-京都/075-253-6565

ローソン・チケット/0570-00-0403

エラート音楽事務所/075-751-0617

主催●イタリア文化会館-京都

お問合せ●エラート音楽事務所/075-751-0617

Istituto Italiano di Cultura - Kyoto

イタリア文化会館 - 京都

イタリア大使館文化部



Tel.: 075-253-6565

Fax: 075-253-6550

E-mail: infokyo@italcult.or.jp

http://www1.odn.ne.jp/iic-kyoto



La nascita della cultura fiorentina

フィレンツェ文化の誕生

La musica a Firenze dal '200 al '600
13世紀から17世紀までのフィレンツェの音楽



Ensemble Musica Ricercata
(direzione: M^o Michael Stüve)

アンサンブル・ミュージカ・リチェルカータ
(主宰：ミハエル・シュトゥーヴェ)

2005年4月8日(金)

京都府立府民ホール アルティ

開演：19:00

Guillaume Dufay (1400 ca - 1474)
Canzone sacra "Vergene bella, che di sol vestita" (testo: Franco)

Anonimo (sec. XIII-XIV)
Lauda "Iesu Cristo redemptore"

Gherardello da Firenze (morto 1362 ca)
Gloria

Donato da Firenze (prima metà del sec. XIV)
Virelai 'Je port amiablement' (strumentale)

Andrea da Firenze (morto 1415)
Ballata "Cosa crudel m'ancide"

Francesco Landini (morto il 2 sett. 1397)
Ballata "Gram piant'agli ochi"
Ballata 'La bionda treccia' (strumentale)

Giovanni Mazzuoli (1360 ca - 1426)
Canzona "Quand'amor"

Anonimo (sec. XIV)
Caccia-madrigale 'Quan ye voy le duç tens venir' (strumentale)

Guillaume Dufay
Mottetto "Mirandas parit haec urbs florentina puellas"

Intervallo

Heinrich Isaac (1450 ca - 1517)
Pezzo strumentale: **A la bataglia**
(scritto per la Rappresentazione di S. Giovanni e Paolo di Lorenzo il Magnifico)

Francesco Layolle (1491-1540 ca)
"Vien dunque, Amor" (testo: Giovanni Boccaccio)

Bartolomeo Fiorentino (1474-1539)
'Meyor d'este non ay' (strumentale)

Bernardo Pisano (1490-1548)
"Così nel mio parlar" (testo: Dante Alighieri)

Jacob Obrecht / Virgilius
Nec mihi, nec tibi (strumentale)

Francesco Corteccia (1504-1571)
"Dentr'a Fiorenza"

Iacopo Peri (1561-1633)
Lamento di Orfeo "Non piango" tratto dall'opera Euridice (1600)

Francesco Corteccia
"Felici e lieti giorni"

ギヨーム・デュファイ (1400年頃-1474年)
宗教的カンツォーネ『陽光に身を包む麗しの乙女よ』
(作詩: フランチェスコ・ペトラルカ)

作者不詳 (13-14世紀)
ラウダ『救い主イエス・キリスト』

ゲラルデット・ダ・フィレンツェ (1362年頃没)
『栄光』

ドナート・ダ・フィレンツェ (14世紀前半)
ヴィルレー『私は愛らしく』(楽器演奏)

アンドレア・ダ・フィレンツェ (1415年没)
バッラータ『残酷な何かが』

フランチェスコ・ランディーニ (1397年9月2日没)
バッラータ『目に涙の海をたたえて』
バッラータ『金の編み毛』(楽器演奏)

ジョヴァンニ・マツォーリ (1360年頃-1426年)
カンツォーナ『愛があなたのまなざしを』

作者不詳 (14世紀)
カッチャ・マドリガーレ『心地よい季節が戻ると』(楽器演奏)

ギヨーム・デュファイ
モテトゥス『フィレンツェは見事なる乙女らを産す』

休憩

ハインリヒ・イザーク (1450年頃-1517年)
器楽曲『戦い』
(1489年, ロレンツォ大公による宗教劇『聖ヨハネとパオロ』の音楽)

フランチェスコ・デ・ライヨッレ (1491年-1590年頃)
『愛よ, 来たれ』(作詩: ジョヴァンニ・ボッカッチョ)

バルトロメオ・フィオレンティーノ (1474年-1539年)
器楽曲『これ以上の物は』

ベルナルド・ピサーノ (1490年-1548年)
『かように我が言葉も』(作詩: ダンテ・アリギエーリ)

ヤコブ・オブレヒト, ヴィルジリウス 合作
器楽曲『私にでも君にでもなく』

フランチェスコ・コルテッチャ (1504年-1571年)
『フィレンツェでは』

ヤコポ・ペーリ (1561年-1633年)
『私は泣かない』(音楽劇『エウリディーチェ』より, オルフェオの)

フランチェスコ・コルテッチャ
『幸せで楽しい日々』

曲目解説 (ミヒヤエル・シュトゥーヴェ)

「フィレンツェ文化の誕生—13世紀から17世紀のフィレンツェの音楽」と題するこのプログラムは、フィレンツェの音楽の紹介を通じて、ヨーロッパ音楽の発展にとって重要な幾つかの側面に光を当てる。それは多声音楽の出現から、音楽劇が発明される時代にまで及ぶ。演奏会は二部からなる。各部が約一世紀半の歴史に相当し、その時期に生まれた声楽と器楽の曲を取り上げる。

第一部の冒頭は、フランチェスコ・ペトラルカの有名な詩にギョーム・デュファイが作曲した宗教的カンツォーネ『陽光に身を包む麗しの乙女よ』。デュファイはイタリアで活躍したフランス・フランドル作曲家たちの最初の世代を代表する人物である。フィレンツェにも暫く滞在し、メディチ家から重用された。コンペールやティンクトリスなど多くの同時代の音楽家たちは、デュファイを「新たな芸術」の始祖と見なしている。それは、ようやく「音楽芸術」の名に値するものとなった。演奏会の第一部は従って、私たちに14世紀の最も古い音楽へと導く。のちに15世紀の音楽家たちが、この種の曲目を「良き音楽」だと思わなかったのは正當かどうか。客席の皆様は判定を委ねたい。

デュファイのカンツォーネに続き、宗教的な曲をさらに二つ演奏する。それ以降の声楽曲はすべて、愛とそれに起因する苦悩に捧げられている。13世紀末に起こった詩の流派である「清新体派」は、このような題材を好んだ。

『救い主イエス・キリスト』は復活祭の聖金曜日のラウダ（賛歌）。本日のプログラムで唯一の単声曲であり、フィレンツェ国立中央図書館に所蔵の有名なラウダ集に収められている。俗語詩を単声曲にしたラウダは広く普及し、中世に信仰と慈善に携わる組織であったキリスト教信者会において歌われた。14世紀最初のフィレンツェ人作曲家、ゲラルデッロ・ダ・フィレンツェによる『栄光』は、同じく彼の作である『神の小羊』と共に伝わり、この二曲がミサ通常文一式を音楽化した最古の曲の一部分だった可能性もある。ミサ通常文は、西洋音楽史で最初の大規模な楽曲形式となる。

とはいえ、14世紀フィレンツェの音楽家たちは、あまり典礼曲を書かなかった。彼ら自身が僧侶だったにもかかわらず、パリで14世紀初頭に流行した定型曲と同様の、世俗的な音楽と詩の形式に専念した。ゲラルデッロより少し年下でベネディクト会修道士だったドナート・ダ・フィレンツェは、『私は愛らしく』と題して楽譜に歌詞が書かれていない曲を残した。これはフランス風ヴィルレーの一例である。音楽の図式はABBAで、イタリアのパッラータに対応する。パッラータは14世紀後半に最も盛んに用いられた形式であり、本日はその三つを演奏する。一曲目は、アンドレア・ダ・フィレンツェが作曲し、愛の苦しみを劇的に嘆く『残酷な何か』。アンドレアは、フィレンツェ人音楽家で二番目の世代に属する。さらに、フランチェスコ・ランディーニ二作曲『目に涙の海をたたえて』と『金の編み毛』が続き、その後者は器楽曲である。ランディーニ二は14世紀のイタリア人音楽家では最も有名な人で、幼い頃から目が見えず、「盲目の音楽家」のあだ名で呼ばれた。彼の墓はフィレンツェの聖ロレンツォ教会にある。14世紀にはフィレンツェ女性の大部分が、多くの絵画に描かれているように金髪だった。それが、「金の編み毛」という言葉から思い出される。

ジョヴァンニ・マツォーリ作曲『愛があなたのまなざしを』は、南フランスの吟遊詩人たちにより完成された「カンツォーナ」の形式をとる。14世紀イタリア音楽ではこの形式よりも、マドリガーレのほうが代表的である。マドリガーレは音楽

の図式がAABであり、しばしば「カッチャ」、すなわち異なる声部が模倣しあうカノンからなる。カッチャはイタリア音楽に特有の形式だが、本日演奏する曲『心地よい季節が戻ると』の題名は、フランスのあるシャンソンに由来する。14-15世紀には様々な国の間で文化交流が盛んだったことが分かる。

ギョーム・デュファイはフィレンツェでモテトウスを三つ作曲した。そのうちの一つ、『フィレンツェは見事なる乙女らを産す』で演奏会の前半を締めくくる。デュファイは厳粛な記念日にちなむ宗教と世俗のモテトウスを非常に得意とした。この曲の歌詞はラテン語なので堅苦しい印象を与えるが、フィレンツェ娘の美貌をたたえた内容は現代にも通用しうる。デュファイはイタリアでフランドル人音楽家たちの時代を切り開いた。それは絵画の分野で、ヤン・ファン・エイクをはじめとするフランドル派が果たした役割に似ている。フランドル人音楽家のハインリヒ・イザークは、とりわけフィレンツェとの縁が深かった。彼はこの町で結婚し、ロレンツォ大公の文化的な催しに関わり、大公の子息に音楽を教えた。事実、のちに教皇レオ十世となるジョヴァンニ・デ・メディチは優秀な音楽家に育った。イザークは1517年にフィレンツェで没した。彼の器楽曲『戦い』は、ロレンツォ大公の自作で1489年に上演された宗教劇『聖ヨハネとパウロ』に用いられた。

イタリア人作曲家たちは15世紀全体を通じて、フランドル人たちの優位に押されていた（これに反してバロック音楽の時代には、イタリア人たちがヨーロッパ全域の音楽に決定的な影響を及ぼしたのだが）。ロレンツォ大公はフェッラーラ、ミラノ、ナポリの有力な知人の協力を得て、フィレンツェに有能な音楽家を招くことができた。16世紀に花開いた正真正銘の「フィレンツェ楽派」は、大公の友人だったイザークに始まり、「フィレンツェのカメラータ」につながる。そしてこのカメラータが、音楽劇の誕生に寄与したとされる。

16世紀の比較的に重要な作曲家として、フランチェスコ・デ・ライヨッレがいる。彼は画家アンドレア・デル・サルトの友人だった。デル・サルトが描いたこの音楽家の肖像が、フィレンツェの聖アンヌツィアータ（お告げの聖母）教会に残されている。デ・ライヨッレ作曲『愛よ、来たれ』は、ジョヴァンニ・ボッカッチョの『十日物語』で二日目の結びに現れるパッラータ。16世紀には、このような14世紀の古い詩に表情豊かな音楽をつけ直した曲をも「マドリガーレ」と称した。ただし、14世紀の同名の曲種とは形式が異なる。

フィレンツェ出身のベルナルド・ピサーノは、最も古いマドリガーレ作曲家の一人。「ピサーノ」と呼ばれるのは、ピサで修行したためと推測される。彼はダンテ・アリギエーリ作『石の詩』の一つに音楽をつけた。ある女性と、愛に対する彼女の抵抗を、人情とは無縁な石にたとえた詩である。このマドリガーレに先立ち、ベルナルドの教師だったバルトロメオ・フィオレンティーノの曲を演奏する。

続く器楽曲『私にでも君にでもなく』は、フランドル人音楽家ヤコブ・オブレヒトと、フィレンツェにおける彼の僚友ヴィルギリウスとの合作で、題名が彼らの協力を暗示する。ルネサンス期の対位法技術を象徴する曲でもある。さらに、ベルナルド・ピサーノの弟子、フランチェスコ・コルテッチャが作曲したマドリガーレが二つ。愛のカンツォーネ『フィレンツェでは』と、メディチ家が治めるフィレンツェでの生活を賛美した『幸せで楽しい日々』。この二曲の間に、音楽劇『エウリディーチェ』から、オルフェオの嘆きを演奏する。音楽劇は1600年、マリア・デ・メディチとフランス国王アンリ四世の婚礼にあわせて、オッタヴィオ・リヌッチーニの詩に、ヤコポ・ペーリとジューリオ・カッチーニが作曲したものである。



Musica Ricercata ミュージカ・リチェルカータ

M^o Michael Stüve, direttore
ミヒャエル・シュトゥーヴェ (主宰)

1989年にミヒャエル・シュトゥーヴェによって創設されたこのグループは、1998年に音楽芸術と文化の普及を目的に掲げた非営利組織となる。フィレンツェの偉大な音楽遺産をもとに演奏活動や研究活動を繰り広げており、珍しいプログラム構成、テーマの特異性もさることながら、古代ギリシャ音楽から現代音楽まで西洋音楽史の流れに沿った再現で高い評価を得ている。主宰、音楽監督を務めるM.シュトゥーヴェのもと、ヨーロッパ各地、ロシア、日本で演奏活動を行い、イタリア及び国外において数多くの音楽祭に出演する。放送局での録音も多くこなす傍ら、国際会議、講演会、セミナー、セミナー・コンサートを主催、出席をし、音楽研究活動の成果として出版物もだしている。

Controtenore

Alessandro Carmignani

カウンターテナー

アレッサンドロ・カルミニャーニ

Viella

Michael Stüve

ヴィエツラ

ミヒャエル・シュトゥーヴェ

Flauto dolce

Shigeharu Yamaoka

リコーダー

山岡重治

Viola da gamba

Masako Hirao

ヴィオラ・ダ・ガンバ

平尾雅子

Trombone

Sergio Bernetti

トロンボーン

セルジョ・ベルネッティ

主催：イタリア文化会館

マネジメント：エラート音楽事務所